



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コロナ関係資料収集の意義と必要性
Author(s)	持田, 誠
Citation	博物館研究 no.630, 55(11), 21-24
Issue Date	2020-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82135
Type	journal article
File Information	hakubutukankennkyuu_55(11)_21-24.pdf



コロナ関係資料収集の意義と必要性

浦幌町立博物館学芸員、北海道大学総合博物館資料部研究員

持田 誠

1. 日常の収集活動の延長であるコロナ関係資料

浦幌町立博物館は、北海道の東部、十勝地方と釧路地方のちょうど中間に位置する、人口4,500人ほどの十勝郡浦幌町にある。学芸員は、フルタイム会計年度任用職員が1名配置されている。専任の館長は置かれていない。時代や分野に特化していない、典型的な郷土資料館型の地域博物館である。

当館では現在、昨今の新型コロナウイルス感染症が社会問題化したことで、地域の生活にどのような変化が起こったのかの記録となるような資料を「コロナ関係資料」と呼び、収集している。扱う分野などを限定しない地域博物館であり、また組織が非常に小規模なことが、コロナ関係資料収集にいち早く取り組むことが可能となった一因であろうと考えている。

当館がコロナ関係資料の収集を実施している背景には、主にふたつの流れがある。ひとつは、産業資料収集の流れである。当館では、かねてより新聞の「折込チラシ」を収集してきた。折込チラシは、①発行している商店の種類や数の変化、②掲載されている商品の変化、③活字・彩色などのデザインの变化、など、経時的に収集を行うことで見えてくる情報が多様なのである。また、「生活資料」として、市民団体などが出すさまざまな「お知らせ」などの収集も実施してきた。

こうした日常的な活動の延長線上に、今回のコロナ関係資料の収集がある。特に、北海道が独自の緊急事態宣言を発出した令和2（2020）年2月頃より、折込チラシの中身に顕著な変化が見られるようになり、ついには折込そのものが激減する状況になった。こうした変化が、意識的な収集を心がけるようになったきつ

かけのひとつである。

「コロナな時代」において、『不登校新聞』の記事内容を経時的に観察することで、不登校問題に関する新たな課題を見出そうとした論考に、貴戸（2020）^{注1}の報告がある。このように、すでにコロナ時代の渦中における変化に対する研究が、さまざまな分野で進捗しつつあるが、「コロナ以前」からの変化を記録している点が、当館の折込収集の特徴である。

2. 「今」を集める博物館

もうひとつは、平成28（2016）年に当館の博物館講座として開催した、小樽市総合博物館の石川直章学芸員・館長の講演『「今」を集める博物館：記録する地域博物館の役割』である。石川学芸員の取組は、本誌47巻9号にもまとめられているので参照いただきたい（石川2012）^{注2}。

このなかで石川学芸員は、小樽市の歴史的光景を語る上で欠かせない「ガンガン」に触れている。戦後、ブリキの一斗缶などを利用して、主に魚などの生鮮食料品を港町小樽から周辺の産炭地へ運ぶ人達がいた。早朝に仕立てられた国鉄の行商専用車両に列をなす人々は「ガンガン部隊」と呼ばれ、港町小樽の戦後を代表する光景であった。

この「ガンガン」が、博物館資料として収集されていない。石川学芸員は、これを資料収集の失敗事例として紹介している。小樽に限らず、同時期に使用されていた冷蔵庫などの家電製品に比べ、「ガンガン」のような消耗品を収集対象とする意識が当時の博物館では低かったのが原因と考えられるが、地域博物館の収蔵庫の物理的な容量や予算などからの、現実的な側面による収集対象の取捨選択についても触れている。

当館が現在収集している資料の大半は、行中止のお知らせ、自粛の呼び掛けなどの「エフェメラ資料」と呼ばれる、一過性のお知らせや貼り紙である。感染症の渦中にある「今」収集しなければ、告知の役割を終えるとすぐに捨てられてしまう。小樽の「ガンガン」と同じく、誰かがそこに「資料性」を指摘し、意識的な収集を行わなければ「モノ」は残らない。そしてそれは、「モノ」が映している歴史そのもの、コロナな時代を生き抜いた人々の「素の日常の記憶」そのものを、すっかり忘れさせてしまうことにもつながりかねないのではないのか？

地元スーパーによる折込チラシの自粛を告げるチラシ。令和2年4月下旬。

そこで当館では、日常の折込チラシやお知らせの収集に並行する形で、コロナ関係の資料も重点的に収集することにした。収集は主に学芸員が実施し、そのほかにも事務職員、臨時職員、さらには博物館ボランティアにも協力を呼び掛け、常にアンテナを張って意識的な収集を行っている。

また、博物館の広報誌やSNSを通じて、コロナ関係資料の収集の意義を説明し、提供を呼び掛けた。当初は浦幌町近辺の資料を集めようと考えていたが、徐々に範囲を広げ、現在は収集の緊急性から、特に対象地域を定めずに受け入れている。町域以外からの資料については、ある程度まとまった段階で整理し、各地域の博物館や図書館と相談の上、移管も検討している。

3. 収集の留意点や整理について

当初は学芸員が気の付いたものを収集していたが、やがて広く資料提供を呼び掛けていくにあたり、「コロナ関係資料とはなにか？」という具体的なイメージが持たれにくいという困難性に行き着いた。こちらが求めているのは「感染拡大防止のため、飲食の提供を中止しています」の貼り紙だったり「告別式の会葬はご遠慮いただいています」のお知らせだったりするのだが、そのようなものが博物館資料になると意識している市民は、きわめて少ない。

そこで、常設展示室前のロビーにガラスケース2台分（当初は1台だったが増設した）の「見本展示」を用意し、「このような資料を求めているのだ」というアピールをすることにした。昨今、各種報道機関で「企画展」として紹介されているものがこれだが、実は本当の企画展は令和3（2021）年2月（北海道が独自の緊急事態宣言を出した1年後）に開催を予定しており、現在の展示はあくまでも「収集見本」である。

当館の収蔵資料は、4桁の分類番号を付して登録を行っている。しかし、今回のコロナ関係資料については、分類をやめることにした。「6540」の共通番号を与え、あとは受け入れ年月日順の通し番号（受入番号。当館ではこれが資料番号となる）を付している。

分類をやめた理由はふたつある。ひとつは、資料の属性ごとに「産業」だの「教育」だのと分類する手間を省き、迅速に登録処理するためである。

もうひとつは、へたに分類をしてしまうと、その資料の将来的な活用可能性の幅を狭めてしまう恐れがあるからである。これらの資料については、「今後なにに活用するのか？」「どのような事業や研究に用いるのか？」の目標設定をまったく考えないようにしている。

いまのところは「気になったものはとりあえず収集して残す」「将来、どのような分野に役立つかはわか

らない。が、残しておけば何かに役立つ可能性がある」という姿勢である。

これは調査研究だけでなく、展示についても同様で、来年2月の企画展を除けば、展示を目的としていない（そもそも展示映えるものは無い）。

「コロナ関係資料」専用の衣装ケースを数個用意し、資料を収集順にどんどん入れていく。一部はクリアファイルに整理収納をはじめたが、整理作業についてははまだあまり進めていない。

資料カードへの記録は重視している。すなわち、「いつ」「どこで」「だれが」「採集した資料か？」もしくは「誰が作った？」「どのようにして入手した？」などの二次情報である。「日本のマスクが品薄になったことを知った中国在住の親類が、向こうのマスクを送ってくれた」などの談話が、その資料の価値を高めるからである。

残念ながら、当館はデジタル化が一向に進んでいない。いまま厚紙の「資料記録票」（原簿）に手書きとゴム印で必要事項を記入。そこにプリンタで打ち出した写真を貼る。チラシ1枚1枚について、これを作る作業量は膨大で、博物館ボランティアの方々のご協力を得て進めている。

4. コロナ関係資料の収集に対する反応

ロビーの見本展示や、新聞報道などを通じて寄せられる声で、もっとも多い反応は「こんなものをわざわざ残すのか？」というものである。これはすなわち、博物館がいくら資料提供を呼び掛けても、それだけでは求めているような資料は集まって来ない、ということを示している。やはり、学芸員による意識的な収集が、保存につながるカギとなる。

「どちらかといえば、つらい歴史、早く忘れてしまいたいような嫌な時代のことを、あえて記録しようという考え方が不思議」という声もあった。ここにも、すでにコロナな時代における生活の伝承（記録）が失われつつある危惧を感じる。「嫌な事はさっさと忘れてしまおう」という、ある意味、社会生活を送る上では必要な意識が、日常の生活を記録するという観点からは危険なのである。時間が経つと記憶が風化するばかりか、歪曲や美化されたりしてしまう危険にも通じる。やはり、集めるならば渦中にある「今」なのである。

「どんな事に役立つと考えていますか？」という質問には、最近では率直に「わからない」と答えている。実は、当初は想定される研究テーマなどを回答したこともあった。だが、資料の属性に博物館が固定的な「色」を付けてしまいかねないことから、活用の方向性については、なるべく明言を避けようと考えている。

「展示が目的ではないものを地域博物館が（もしくは教育委員会が）収集・保存する意義はなにか？」との声もあった。これについては、そもそもなぜ、博物館はコロナ関係資料を集めるのか？という意義そのものについて、粘り強く説明するしかない。

5. なぜコロナ関係資料を集めるのか？

街角の電柱に貼られた「ぜいたくは敵だ！」と書かれた貼り紙の写真を目にして、私たちが第二次世界大戦中の世相を感じることが出来るのは、当時その貼り紙を記録した人がいるからである。同じように、いま、コロナな時代をつぶさに観察し、歴史を記録するモノを収集する最前線に立つのは、いまを生きる博物館人であり、学芸員である。

50年後や100年後、「あの時代はこんなだった」と、振り返ることができる資料を残すこと。博物館が、歴史を「モノ」で残し伝える意味はそこにあるが、地域博物館にはさらに、国や自治体が公文書や町史などで書き記した「公式の」記録ではなく、そこからは洩れてしまう市井の人々の「素の日常」を記録する役割がある。教科書的な、権力に都合の良い記述ではなく、「そのとき実際になにが起きていたのか？」を客観的に振り返ろうとした際に役に立つような資料をこそ、かき集めて残す使命が博物館にはあるはずである。

津波や地震とは異なり、感染症は、日常の街並みなどに変化は無い。変化は街の外観ではなく、人々の暮らしのなかに現れる。政府の発表、巷に流れる風説、それに翻弄される人々の暮らしは、わずか半年の間に目まぐるしく変化している。その変化の速度と中身こそが、この時代の特徴を表しているのであり、そこをどう記録するかが私たちの役割であろう。

未知の感染症は社会生活にいったいどのような混乱をもたらすのか？いま収集しているコロナ関係資料は、将来新たに未知の感染症が出現したときの社会対策においても、きっと役に立つはずである。

6. 課題や展望など

「今」を収集し、歴史に記録する取組は、決して新しいものではない。しかし、それらの資料をどう収集・整理し、公開・活用していくか？記録化の方法などは、まだ発展の途上であろう。

遠藤（2019）^{注3}は、＜一般大衆は「何を」「どう」食べているかの実態は、なかなか把握しにくい＞として、大衆食堂のメニューを集める事例を紹介している。今回、浦幌町でも、感染拡大防止で外食の自粛が叫ばれると、各店舗でテイクアウトメニューが考案され、商工会がクーポン券やメニュー表などを発行するようになり、それらを資料として収集している。

食べて応援しよう				
浦幌町でテイクアウトが出来るお店				
新型コロナウイルスの影響により、外出や宴会が控えられている中、飲食店では大きな打撃を受けています。下記のお店ではテイクアウトを実施しておりますので、こんな時だからこそ、食べて飲食店を応援しましょう。				
店名	住所	電話番号	営業時間	メニュー（一例）
ちゃんこ両国	本町	576-3075	11:30~14:00 17:00~21:00	ちゃんこ鍋・からあげ
かし和家	本町	576-2438	11:30~17:00	各種そば（出前可・要問合せ）
食のてんま	本町	576-2163	11:30~14:30 17:00~20:00	温かいおからセット（ハンバーグ・ロースカツほか）
レストラン 大和	串町	576-3915	11:30~20:30	スパカツ・スペシャルライス・天丼ほか
レストラン URATIE	北町	578-9396	11:30~14:00 17:00~20:00	パスタ・カレー・丼ものほか
伊ばた たらふく	串町	576-5075	17:00~22:00	焼き鳥・牛タン・鶏もも・たこザンギほか
居酒屋 風	栄町	576-2665	17:30~24:00	焼き鳥・焼き魚ほか
軽食喫茶 カナリア	串町	576-2176	11:00~22:00	ピラフ・パスタ・ピザほか
TOKOMURO Café	常盤	578-7580	11:30~19:00	黒石キーマカレーほか（出前可・要問合せ）
寶龍焼肉店	東山町	576-5020	11:00~19:00	各種ラーメン
食堂 あべ	栄町	576-3563	17:00~22:00	やきそば・餃子ほか
寿司処 飯正	栄町	576-2415	16:00~22:00	寿司・天丼（出前可・要問合せ）
すしよし	栄町	576-2907	不定時間	そば（出前可・要問合せ）
ほろよい食堂	串町	576-2436	17:00~21:00	天丼・豚丼・チャーハンほか
鹿嶋	貴老路	576-6740	11:30~16:00	ザンギ・カツ定食ほか
まる maru	本町	—	11:00~17:00	おやき・お好み焼き・たこ焼き
ちいさな街のパンやさん	住吉町	576-3410	10:00~18:00	各種パン
お菓子の店 ニシムラ	本町	576-4661	9:00~19:00	ケーキ・焼き菓子ほか

※ メニューは一例です。詳しくは店舗にお問い合わせください。
 ※ 定休日は店舗で異なりますので、店舗にお問い合わせください。
 ※ 注文する際は事前に店舗へご連絡ください。
 ※ 店舗状況によってはご希望に添えない場合がございます。予めご了承ください。

発行：浦幌町商工会・浦幌町

商工会が発行した町内のテイクアウト実施飲食店のチラシ。令和2年7月。

小樽市総合博物館の菅原慶郎学芸員は、さらに一歩進めた記録に取り組んでいる。コロナ対策で、中華料理店が特別にテイクアウトのみで販売した「シウマイ」について、中身の写真を撮り、店の協力を得て蒸し器に入れた状態も撮影した。菅原学芸員は「今は写真がスマートフォンなどで手軽に撮影可能となり、料理写真もインターネット上ですぐに見られるが、博物館の資料収集を振り返ると、看板や容器、メニュー表などはあっても、肝心な料理の写真が意外にも残されていないことに気がついた。」と述べている（菅原氏私信）。

これは、コロナ関係資料の収集を通じて気づいた、生活文化史記録の課題である。今後、当館でも、同様の方法を検討していきたい。

当館がなかなか集めきれずにいるのが、学校が休校している間の子どもの勉強や暮らしに関する資料である。何人かの先生方には、個別に協力を依頼してきたが、学校現場は、子ども達の情報（特に名前）が残ることを危惧している雰囲気がある。博物館としては、名前の載っているもの、個人が特定できるものの方が具体性があるという考えがあるが、博物館としても活用の方向性を定めていないだけに、説明が困難なものも事実で、今後、教育委員会（校長会）などを通じて、文書で協力要請を試みる予定でいる。

同様に収集困難な資料が、コロナをきっかけとして各地で起きている「差別」「偏見」に関するものだ。大規模な感染症の流行は、情報の錯綜、不安感、恐怖心から来る差別や偏見を生み出しやすい。日本心理学



函館市民が事情で函館以外のナンバープレートをつけている自動車への嫌がらせを防止するため考案された「函館在住」ステッカー（令和2年5月。北海道新聞道南版）

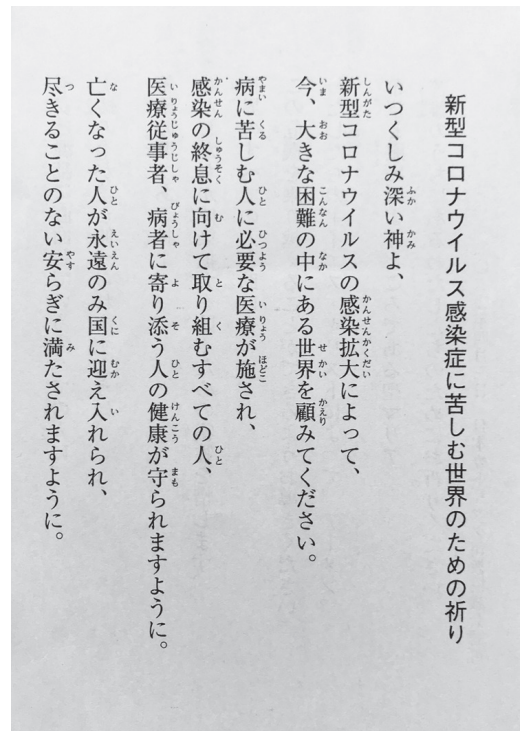
会は、今回いちはやく呼びかけを発信しており^{注4}、また社会不安の原因や心のケアについても、臨床心理の分野で議論が盛んである^{注5}。だが、現実には資料収集は難航している。これは、そもそも「モノが無い」ということも背景にあるらしい。

かつては、「日記」や「手紙」に記された人々の「想い」が、昨今はメールやSNSなどのデジタルで発信される。差別や偏見についても、「モノ収集」を重視している限りは集まらず、聞き取りを実施し、学芸員が活字化して、ようやく記録できる。今後は、Twitterの差別言動を画面保存するなどの新しい方法が必要だと思われるが、当館では取り組んでいない。しかし、「モノ」の収集と並行した、聞き取りや写真などの記録が、やがて残された「モノ」と合わさることで、当時の生活再現度を高めることは言うまでもない。

テイクアウト文化の無かった浦幌の食堂が、今回のことをきっかけに一気にテイクアウトを発達させたように、都心と地方では、同じ「コロナな時代」でも異なる現象が起これと考えられる。都道府県立レベルの博物館と、市町村立レベルの博物館で、おそらく見ている風景や感じている空気も異なる。それをいかに体系化していくかが課題だが、すでに失われてしまった資料も多いと考えられる。

引用文献

- 注1 貴戸理恵, 2020.『不登校新聞』のコロナ関係記事に見る「休校による不利益」の不可視性. 現代思想48 (10): 73-81.
 注2 石川直章, 2012.「今」を記録する地域博物館. 博物館研究47 (9): 27-30.
 注3 遠藤哲夫, 2019. おれの「食の考現学」. 現代思想47 (9): 71-77.
 注4 日本心理学会広報委員会, 2020. 新型コロナウイルス (COVID-19) に関わる偏見や差別に立ち向かう (Combating bias and stigma related to COVID-19)「コロナウイルスとともに広がる偏見, 差別を止めるには」https://psych.or.jp/special/covid19/combating_bias_and_stigma/
 注5 たとえば雑誌『臨床心理学』20 (4)「緊急特集: コロナウイルス時代のカウンセリング」など



カトリック教会の祈祷文「新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り」（令和2年4月）

感染拡大防止のため、多くのキリスト教会が毎日曜日の礼拝やミサを中止するなどした。カトリック教会では「新型コロナウイルスに苦しむ世界の人々のための祈り」を祈祷文として制定し、日曜日のミサの度に祈りを捧げている。

かつてスペイン風邪が大流行した時代の人々の暮らしが、実はあまり残っていないことが知られている。これに対して、イギリスなどヨーロッパの博物館では、今回のコロナ関係の資料収集にいちはやく取り組んでいる。日本でも、博物館に限らず、図書館や文書館の分野で、「コロナな時代」を記録する取り組みが全国各地で広がっている。

いまだどれくらいの博物館や図書館、文書館が、コロナ関係資料の収集を実施しているのか？の把握が必要に思う。北海道内については断片的な情報は入っているが、まだ全容がよくわからない。今後はネットワーク化し、収集資料の偏りや地域分散、役割分担などの明確化も必要ではないかと感じている。

（もちだ・まこと）